

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 33～

## <食事>

杉江 太朗

### ～食べるということ～

人は食べなきゃ生きていけない。当然である。とは言っても、生きるためだけに、ただ機械的に食べているのかと言えばそうではない。良くも悪くも食べるということには、何かしらのエピソードが伴う。この仕事をしていて、子どもの様々な食に触れ、様々な物語を感じている。そのことをテーマに書いていきたい。

### ～一杯のうどん～

とある社会的養護にいた思春期の子ども。生活場所から飛び出しては大人が探しに行くということが続いていた。大人が用意した食事を食べようとせず、身体的にも心配がされた。ちょっと走ってくると言ってはどこかに行ってしまい、しばらくするとフラフラの状態に戻ってきた。冬の寒い日のこと、その日の泊まりは、それほど勤が良いとは思えない男性の職員。日が変わるかどうかの頃に、いつものようにフラフラの状態に戻ってきた。いつもなら、そのまま部屋に戻るところだが、ちょうどその職員が、自分の夜食（うどん）をリビングで調理して

いたからか、たまたまりビングに居座り、その職員も、1玉も2玉も調理時間は変わらないと思ったのか、何も言わずにその子の前にもうどんを出した。お互い言葉はほとんど交わさず、取り敢えず熱い一杯のうどんを食べたらしい。

その後、面接に行ったとき、その子から〇〇さんがうどんを作ってくれたと話してくれた。普段、施設では夜中に何かを食べることはほとんどない。その子にとっては、フラフラの状態に戻ってきて、出汁の匂いがしたから、リビングに居座り、気付いたらうどんが出てきたらから食べたということであった。その話の流れで、昔冷蔵庫にはうどんしかなかった。うどんだけはあったから生き延びられた、うどんを食べながらそんなことを思い出していたなどと語る。その後、フラフラ出ていくことは少し減ったように見えた。食事に関しても少しずつ口にするようになっていった。その職員が意図してうどんを出したのか、たまたまあったから出したのかはわからない。ただ、少なくともその子の胃には染みて、過去を回想させるきっかけにはなったようである。そ

の話聞きながら、その職員が最適なタイミングで何も言わずにうどんを提供していた姿を想像して、こちらの心も動かされた。

### ～骨のない魚～

とにかく魚が嫌いな子ども。食事や給食で魚が出ると、とたんに食欲がなくなり、ほとんど手をつけなかった。魚に何か良くない思いであるのだろうとは想像ができたが、多くは過去のことを語らなかった。何も食べないよりは、アレルギー対応のように魚介類を一切、提供しないという方法もあったのかもしれないが、集団生活であったり、将来の事を考えたりしたときに常に出さないという選択が出来ず、対応する大人も苦慮していた。

そんなとき、ホームの行事で回転寿司に行くことがあったらしい。そもそも行った経験が少なかったのかもしれないが、周りがお寿司を食べているのを見て、お寿司を食べてみようと思ったらしく、職員もとりあえず自身の魚でも食べてみたら程度に勧めてみたら、同じ魚でも骨がないという理由でお寿司は食べられたらしい。施設にいと、衛生上の問題で、刺身やお寿司などの生魚が食卓に並ぶことはほとんどない。この子は、お寿司を食べて以降、少しずつ食卓に出る魚に興味を示しはじめ、食べるようになっていった。どうせ食べるなら綺麗に骨を取れ

るようにと職員も魚の骨の取り方を丁寧に教えた。その経過の中で、焼き魚を食べることを強要されていたこと、骨を取ることさえも許されず、硬い骨まで食べさせられていたことなど語り、そんなときに魚の骨のないお寿司を食べ、魚の美味しさを知り、魚に罪はなく、食べさせ方、提供の方法が間違っていたのだと親から受けた自身の体験を整理し始めた。

今まで自身の体験を多くは語ってこなかった。魚嫌いという評価ではあったが、魚嫌いではなく、魚に秘められた過去の物語があったのである。魚を食べることを無理強いさせず、かといって、魚から一切離れた生活を送らせるわけでもなく、本人のペースを尊重した結果、物語が紡がれるようになった。食事と物語の親和性を大きく感じたエピソードであった。

### ～物語を紡ぐきっかけ～

上記したうどんを作った職員にしても、一緒にお寿司を食べに行った職員にしても、何かを意図して食べさせたというわけではなく、たまたま帰ってきたからとか、たまたまホームで回転寿司に行ったからとかいうように偶然食べることになっただけである。後者の職員については、回転寿司に行けば、うどんやラーメンなどお寿司以外の食べ物もあるからという理由でその店を選んでいたのであるかもしれない。ただ、食べさせたのは偶然かもしれないが、結果として本人らの過去の物語

を紡ぐことが出来たのである。

「虐待」という言葉には、物語を押し込める作用が働くと思っている。虐待という言葉を知って、知ったような気持ちになっている人もいるが、実際に子どもが目の前にして、虐待という言葉だけで、その子どもの過去の体験や出来事をどれだけ知ることが出来るのだろうか。当然、その言葉だけでは、過去の体験を知ることが出来ない。ただ、物語として本人が語り始めたとき、ようやくその体験を共有することができる。そのきっかけが今回の場合、「一杯のうどん」であり、「骨のない魚」だったのである。

物語に直接アクセスしようとしても、過去のしがらみを抜けて、たどり着くことは難しい。また一方的な聞き方では、子どものタイミングで語ることを否定してしまうことに繋がり、負担が大きくなる。子どものタイミングで物語を語れるようになるには、やはりきっかけが必要である。

### ～食というきっかけ～

今、生きているということは、それまでに何かしら食事を取ってきたということである。その量や質、方法、食べた種類、栄養量、そのバランスなどはそれぞれによって異なる。ただ、「食べる」という行為を続けていた以上、そのことをきっかけに語られる物語があるのではないだろうか。例えば、お正月のお雑煮の具

材を聞くだけでも、その子どもの育ってきた文化を知ることが出来て面白い。この前、雑煮に餛飩餅を入れる、入れないで喧嘩になる父母がいたと聞いたことがある。どちらかが四国の出身であつたらしい。(四国の人は雑煮に餛飩餅を入れるらしい。実際に年末に香川のスーパーに行ったら、餛飩餅がたくさん売っていた。)

過去の体験は、必要以上に聞き出そうとしても語られるものではない。その子どもが、どのような環境で育ってきたとしても、今の生活では、キッチンと大人に胃袋を掴んでもらい、子どもにもキッチンと胃袋を差し出してもらえらる関係性を構築したい。好きなものを好きなだけではなく、栄養のバランスだけに気を付けるわけでもなく、疲れたときには優しい物を、お腹が空いたときには少し大盛りの物を、そんな何気ない配慮が子どもの物語を紡ぐきっかけになるのではないかと考えている。